

## 書評

## 『日本は写真集の国である』

著者：金子隆一 監修：築地 仁

梓出版社 2021年5月28日初版

本書は2021年6月に書店に並び始めた本である。注目の新刊書を紹介するに先立ち、大変悲しいご報告をしなければならぬ。金子隆一氏は2021年6月30日ご逝去された。本書が店頭に並んですぐ、また1948年生まれで73歳の誕生日を迎えて間もなく亡くなられてしまった。大変残念であり、お悔やみ申し上げる。

金子氏のご業績について短く語るのは困難である。本職は僧侶、写真史家、写真評論家、東京都写真美術館専門調査員(2014年まで)、写真展ほかの企画、そして3万冊を超える写真集の収集家ということまでは、最低限取り上げる必要がある。「金子さんの脳内に構築されていた、写真の歴史で作られた写真宇宙が消滅してしまった」という追悼の言葉を発せられている方(田中長徳氏)もあり、写真界においてはかけがえのない方を失ったことになる。

日本写真学会との関係では、2015年度の東陽賞の受賞者である。授賞理由は「日本写真史の教育・研究および出版、展覧会を通じた日本写真の紹介」である。

故人についての説明が先行してしまったが、遺作(と思われる)をご紹介します。Fig. 1は表紙の外観、Fig. 2は裏表紙の外観である。帯に印刷されている言葉を引用したい。「写真家という一点に、日本人写真家は、エネルギーを注ぎ込んだ。僕にとって、写真に関わることは、そんな写真集を買うことだった。金子隆一」、「日本の写真集が国際的に注目されるようになって久しい。欧米とは一線を画して、日本では写真集が、理想的な写真表現の形であり続けた。」また裏表紙側の帯には、以下の文章が掲載されている。「ある時は日蓮宗のお寺を守る住職、ある時は東京都写真美術館の学芸員だった。そんな著者が案内する高度な独自の進化を遂げた日本の写真表現と写真集の世界。」

本書の構成について触れたい。監修者の築地仁氏は写真家で、金子氏ほかと1979年に“CAMERA WORKS”という共同プロジェクトを開始して以来の共同作業者である。本書では監修に関わり、4ページのあとがきを執筆している。本書は冒頭に32ページのカラー口絵を配置、写真集の外観と一部の内容を紹介している。東京都写真美術館の協力により、貴重な写真集の写真が収められている。本文は58項目の簡潔なエッセイで構成されているが、その一部を選別することは困難である。本書を紹介しているウェブサイト、全タイトルを掲載しているのに倣い、58項目を転載させていただく。

1 日本は写真集の国である 2 「もの」としての写真集 3 岡村昭彦の「写真」を再考する 4 可能性としての「ネガ」 5 「バス単派」写真家と震災復興、地域再生 6 ヴァナキュラー写真のような渡辺眸『1968年 新宿』 7 ローカリズムによって切り開かれるデジタル時代の映像作品 8 日本写真の中の自主ギャラリー運動 9 ウィリアム・クラインと日本の写真風土のありか 10 21世紀のフォトモンタージュ考 西野壮平、進藤環 11 海外の研究者が問いかける日本写真の新たな問題提起 12 法隆寺金堂壁画ガラス原板にみる可能性としての銀塩写真 13 クラウドソーシング 写真を共有することの175年 14 深瀬昌久の評価にみる日本写真と西洋写真の平行な関係 15 受け継がれてきた「原爆写真」 16 カメラのアクチュアリティ 17 豊里友行『辺野古』からの風 18 蔡國強の壁撞き 19 福島菊次郎が突き付けた遺言 20 新井卓

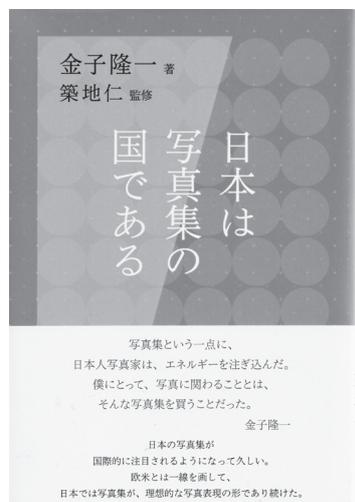


Fig. 1

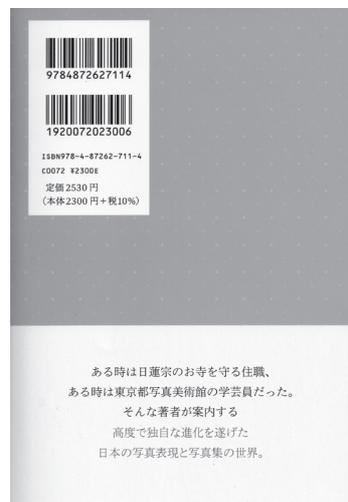


Fig. 2

『MONUMENT』 人類の記憶のモニュメント 21『白陽』にみるコロタイプ・プリントの歴史の厚み 22 森山大道が集積させる写真行為 23 写真史観を問い直す ピクトリアリズムをめぐって 24 集団撮影行動という写真運動 25 ジャック＝アンリ・ラルティエグ 人間を虜にする「写真」という魔性 26 清川あさみ『人魚姫』にみる鈴木理策の写真的行為 27 近代写真の対極に位置するサイ・トゥオンブリーの不鮮明な写真 28 ジュリア・マーガレット・キャメロン 不鮮明であることこそ、正統な美意識 29 杉本博司 ロスト・ヒューマン展 人類と文明の黙示的イメージ 30 塩谷定好と雑巾がけ 31「パリ・フォト」所感 32 オリジナル・プリント中心主義に対峙する写真集のポテンシャル 33 現代的な眼によるフォトモンタージュの発見 34 日本には LIFE がなかったゆえに 35 山崎博 太陽が描く画 36「コンボラ写真」をめぐって 37 先駆者ソール・ライターの写真の「色」 38 バルセロナで写真集展 39 芳賀日出男が指し示す写真民俗学という宇宙 40 拡張映画 エクスパンデッド・シネマ 41 70周年を迎えた「マグナム」 42 写真の見せ方にみる写真家の表現意識の変化 43 アノニマスな個人が生起させる「表現」 44 石内都 粒子は写真の本質 45 現実的な心情を表現した「ベス単派」 46 再評価される幻のコラージュ作家 47 作品を経済化するアートフェアの力学 48 ニューヨークという写真の「場」が持つアカデミックかつ保守的な側面 49 先鋭な画像だけで世界を認識するカメラとハイブリット化した人間 50 スペインという「場」の中の東松照明 51 デジタル写真の時代に変容するアマチュア性 52 エドワード・スタイケンと日本写真 53 印画紙を凌駕すると言いたくなるグラビア印刷の黒の深さ 54 デジタル映像時代におけるエンコースティックの物質性 55 写真都市パリでみた写真集フェアのエネルギー 56 プロヴォークという評価軸 57 物質性が際立つ築地仁のポラロイド写真 58 雑誌の表紙は写真家にとってどのような表現の場か

大変長い転記になってしまったが、これでも本書についての紹介は不足と考える。冒頭部からごく一部を抜き出して加える。

1969～70年代の日本の写真集が国際的に注目されるようになってから、10年以上の時が流れた。この日本の写真集についての注目は「写真集」という写真表現の様式の独自性に対しての新しい評価を国際的に生み出したといつてよい。(中略)それまで海外の美術館や研究者、コレクターにとって「写真集」は二次的な資料という位置づけでしかなかったのが、日本のそれは決して二次的なものとしてはとても見るができない、高度で独自の写真表現を持つ一次的なものであることを認識させたのであった。

重複した説明になるが、高度で独自の進化を遂げた日本の写真集は写真作品を紹介するものにとどまらず、最終的な表現形態であるとの主張である。このため写真集を実際に手に取り、できれば購入して手垢がつくまで対面する必要がある。勝手ながらまとめさせていただいた。本書の冒頭のカラー口絵を見ていくと、実際に写真集を手にしたと強く思う。皆様もぜひ本書を体験していただきたい。

桑山哲郎